

続々・良く利用され なお美しい 矢作川の創造をめざして ——美しい川の条件とは何か——

Towards the creation of beautiful Yahagi River even hardly utilized III.

新見幾男

Ikuro NIIMI

「良く利用され、なお美しい矢作川」「ダムと内水面漁業の共存」などというとき、私たちは気持ちの上でひどく無理をしていると思う。

これは矢作川漁業協同組合の基本方針だから、毎年の漁協総代会などの席で、私は河川環境担当理事として、方針を解説したり一年間の進捗状況を報告したりする。

出席者たちの表情から、こちらの話が信じられていないことが、手にとるようにわかる。「ダムがある限り矢作川はもう駄目だ」「昔の矢作川はもう戻って来ない」と思っている様子なのだ。漁協本部は総代や組合員に対して、実現の可能性のない空論をしゃべっている、と受け取られているように思われる。絶望的空気が支配的なのだ。

矢作川水系で一番大きなダムは、河口から 80 km 地点にある矢作ダム(総貯水量 8000 万トン)である。このダムは昭和 46 年に完成し、それからおよそ 10 年後の頃から、矢作川の悲劇が始まったと思う。

農業用水、工業用水、上水道用水の取水量が、次第に増えていった。矢作川の流量が目に見えて減って来た。それにつれて、流量の季節較差が大きくなった。取水量の約 60%が農業用水だから、そういうことになる。

流量の日夜較差、平日休日較差もひどくなって来た。農業用水等の取水に水力発電が連動しているから、そういうことになる。

要するに、矢作川本流は流量を見る限りにおいて、人工管理の用水路と変わりのない様相を呈して来た。水力発電所がフル発電を始める前などには、河畔のスピーカーが「まもなく川の水が増えて来ますから、川においでの方々は川から出て下さい」などと放送する。矢作川の釣り人は毎日のように、そういう経験をしている。

流量の問題よりさらに深刻なのは、川の水の慢性汚濁である。矢作ダムができてからというもの、川の水の透明度が落ち、清澄感が消えた。流域の山々は花崗岩の風化土でできていて、雨に弱い。降雨のたびに泥水がダム湖に流入し、それがいつまでも下流へ流れ出て来るのだ。好天が永く続く日々でも、矢作ダム下流の水はどこか潤んでいる。

最近 10 年間に特に顕著になって来た現象を言えば、川底の砂が減って来た。矢作ダムの下流にあるいくつかの中規模ダム直下流では、砂浜が完全に消えた。川底は大小の石ばかりになり、コンクリートを張ったように固くなった。魚の産卵が困難になっている。ダム湖の存在の直接の影響で春先の水温の上昇が遅れ、アユの成長に影響が出ているように思われる。

その中規模ダム直下流の固い川底一面に、近年、アオミドロやカワシオグサなどの緑藻類が異常発生するようになった。そこにはアユはもうもう居着かない。川の人々を絶望におとし入れるような、まことに無気味な現象である。トドメをさされた感が深い。

川の仕事には「絶望」が敵である。小さな進歩を積み重ねるしかないことはわかっている。それでも「良く使われて、なお美しい矢作川を」と呼びかける時、それを聞いていてくれる人々と共に、自分たちは無理をしているなあと思うことが多い。

そんな日々、私たちは川の友人らを誘って、河口から 89 km 地点の橋の上へいく。根羽川と上村川の二つの大支流が合流し、そこで矢作川本流が形づくられる。岐阜県上矢作町の小田子（こだこ）という昔の宿場町に、その橋はある。

橋の上から見る矢作川は、川底が白く輝いている。水は清澄である。私たちの生活の舞台である豊田市の中心部は 40 km 地点付近にあるが、そこに昔あった美しい矢作川が、小田子の橋の上から見られる。川に泳ぐアユの目玉を確認できる。矢作川は源から汚れてしまっているのではないのだ。

その小田子の清澄な流れは、すぐ下流にある矢作ダム湖に入っていく。そこに滞留した水が 80 km 地点のダムから放流されるのだが、それはもう私たちがいつも見ている慢性汚濁の水である。

ダムの運用方法を抜本的に改めれば、美しい矢作川は戻って来る。「人間が月へ行ける時代だから、ダム湖の構造改良や運用改善ぐらいは、きっと実現できる」。そんなことを橋の上で言い合うために、私たちは小田子を年に一度は訪れる。小田子は「良く利用され、なお美しい矢作川」の、私たちの心の原点である。

私たちはアユ釣り用の長竿をもって、遠くの美しい川の調査旅行に毎年出かける。アユが釣れなくても、美しい川の方を選ぶ。矢作川の慢性汚濁の風景に、私たちの目が馴れてしまっただけではいけない。数々の美しい川の風景を、眼底に焼き付けておかなければいけない。美しい川の条件とは何かを、体感に教えるための調査旅行である。調査用具は長竿一本。

近自然河川工法の視察でスイスとドイツを訪れた時、川の風景を見る人の目が違うことに、私は驚いた。

バイエルン州の「美しい村づくりコンテスト」で金賞をとったある村で、近自然型河川改修の現場を見た。兩岸のコンクリート壁を取り除き、石積みに変えてあったのだが、その積み方が乱雑だった。

村長さんが現場に来てくれ、「村づくりに続いて、今度は川づくりコンテストでも、この川で金賞をとってみせる」というていた。その村の小川には、マス系の魚がたくさんいた。乱雑に積んだ石のすきまが、昆虫などの様々な生物のすみかになっているのだろう。エサが豊富だから、川魚が多かったに違いない。

大河川では石積みの水制工をたくさん見たが、やはり乱雑に積み、生物のすみかが作ってあった。帰国直後に矢作川でも水制工が作られたが、日本の石工たちは石を整然と積んだ。すきまだらけでは、工事検査に通らないだろうし、事実、いくつかの水制工の中でもドイツ式に近い乱積みものは、住民の評判が良くなかった。

あの小川で「美しい川づくりコンテスト」の金賞をとってみせる、と村長がいうていたのだから、ドイツ人の目には、生物生息空間の存在が美しい川の風景の重要条件なのだろう。

矢作川流域の住民の目は、護岸工事の例でいえば、生物生息空間の存在よりは整然の美の方を追っているように思う。近自然=多自然の名で工事が行なわれても、水辺の曲線が後退し、直線が幅を利かせて来ている。おのずと多様な生物生息空間が単純化してしまう。

徳島県の南端に、海部川という中規模の川がある。ダムの無い川だから大洪水の年には、堆砂で河口が閉塞し、海と川が離れてしまう。そういう閉塞箇所が中流域にもできて、川が途切れ途切れになるのだが、流れのある区間の川底は白く輝いている。水質が落ちたり、緑藻がはびこったりすることはない。

そういう年に海部川を訪れ、アユ釣りをしたことがある。不思議と川に生命の躍動感があった。川は地上で途切れても、そこは伏流し、また湧き出では流れていた。だから流れはあくまで清澄で、小魚や虫たちが泳ぎまわっていた。その年、アユも深みで良く釣れた。それで言うわけではないが、生命の躍動感のあることこそ、美しい川の大きな条件だと思う。

まだ訪れたことはないのだが、白神山地のブナの森から流れ出る赤石川へは、きっと行こうと思う。原生の深い森の中から生まれたばかりの川の美しさを、私はまだ知らない。

来年は豊田市の「水道水源保全基金」が、いよいよ事業化されそうだ。矢作川中流域に住む私たちが、こぞって源流の森の運命を考える年になると思う。森・川・海の「循環」ということも考えてみたい。その前に赤石川を見ておきたい。もうヤマメ・イワナ域だろうから、長竿は無用である。短竿持参で。

昨年、課題山積の矢作川に、天然アユが大量遡上して来た。河口から34 km 地点の明治用水頭首工の魚道を、350万尾の天然アユが通過した。矢作川天然アユ調査会(当研究所の協力団体)の遡上数量確認現場には、若い人や子供の見学もあった。たくさんの人々が、矢作川は海とつながっているのだということを実感したに違いない。天然アユが通過する各ダムの魚道を、電力会社が一斉改良してくれることにもなった。流域の人々が矢作川の将来への希望を、一時的にせよ回復したと思う。

森・川・海の「循環」の諸問題、特に回遊魚の往来について、矢作川流域全体で考える条件が、少しずつ整って来たように思われる。「森と海をつなぐ川」の機能を回復することが、「良く使われ、なお美しい川の創造」の到達目標だと思う。豊田市には淡水水族館建設の構想があるが、森と海の間接の都市の課題として、「回遊魚水族館」の構想を温めてみたいものだ。

昭和46年に矢作ダムが建設された時から、矢作川の悲劇が始まった、と前に書いた。それ以来の矢作川は、農業用水と工業用水と上水道用水を確保することの一点だけを念頭に、「水量」の思想で運営管理されて来たと思う。今日の惨憺たる河川環境事情は、その結果にほかならない。水量確保だけの河川管理思想を、トータルな河川環境管理思想へ転換していくことが、私たちの世代が負わなければならない責任だと思う。矢作川を利用する各団体が、自分たちの職業上の倫理として、河川環境保全型の河川管理思想を育ててほしいものである。